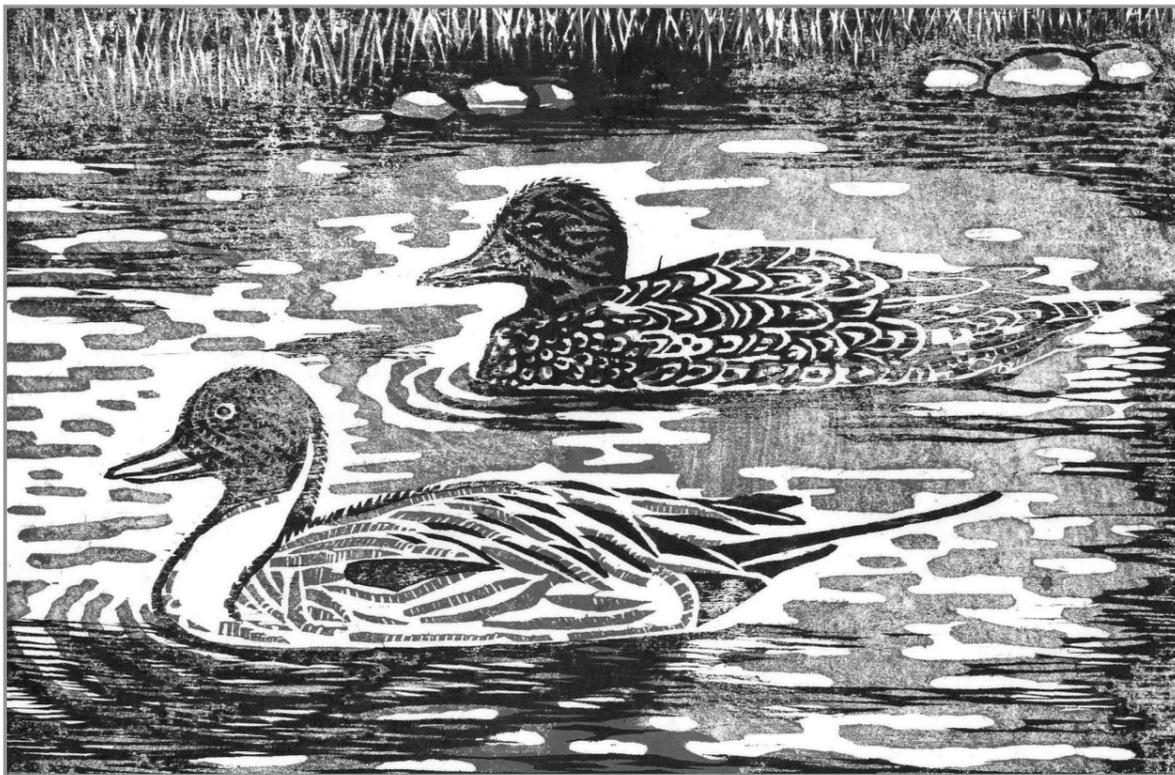


いたちかわらばん

通刊32号 鮪川・狹川 / 川原番・瓦版 06 冬号



(版画 宗森英夫)

(いたち川のオナガガモ)

川面に冬のお客がきています！
いたち川の水面にも冬になると、はるばる飛来するコガモ、オナガガモなどの姿が見られます。一年中見られるカルガモ（留鳥）はおなじみですが、北風が冬を運んでくる頃、空を見上げるとVやWの型になって飛んでくる渡り鳥（冬鳥）は、シベリアなど厳寒の地では氷や雪に閉ざされて餌もとれないので何千キロもの旅をして越冬しに日本各地にきているのです。
やっと辿り着いた頃のカモたちは、痩せて羽の色もつやがなく、雌雄ともに地味な色ですが、やがてオスはメスの気をひく美しい羽色に変わっていき、いろいろ変わった仕草をする様子（求愛ディスプレイ）が見られます。木の葉や雑草に邪魔されずに水鳥の行動をウォッチングする好機です。凶鑑などで調べた予備知識をもって観察すると見る楽しみがぐっと増します。
餌のとり方もよく観察すると面白い発見があるかも？ 岸辺に上がって捜したり水面に浮く餌をすくったり、水中に首を入れて逆立ちしていたり… 最近の湿地が少なくなり、餌不足や巣作りができず、種類が多く見られないのは残念です。どんな物を食べているかどんな所で休んでいるか、そっと見守って春にはペアが仲良く北へ旅立つのを見送ってあげましょう。
湧き水を大切にして川をゴミで汚さず、いつまでもいるいるな生き物に出会えるいたち川であってほしいと願っています。
(つづいす)

大いたち橋・小いたち橋にて キャンドルナイト in さかえ 開催される

昨年6月本郷台駅前で行われたキャンドルナイトの好評を受けて、今度は場所をいたち川沿いに変えて12月17日（土）にしっとり開催されました。

城山橋から大いたち橋・小いたち橋（栄区役所及び柏陽高校裏）にいたる川沿いやその周辺に600本以上のキャンドルが並べられました。川沿いの両側にそれぞれ100本のキャンドル、大いたち橋・小いたち橋に100本、川へ下りる階段にはモミの木の形状に配置された緑色に揺らめく140本のキャンドル、川沿いのいくつかあるスペースにも約200本のキャンドルが並べられ、ゆらゆらと川面に映り、一帯に幻想的な雰囲気醸しだしていました。「冬至の夜もスローな夜を…」を合言葉にキャンドルナイト in さかえボランティアと栄区役所が11月から準備に準備を重ね「いたち川（天神橋～新橋）水辺愛護会」の協力のもとで開催されたものです。会場では、12月22日（木）の冬至の日に、家庭でキャンドルに火を灯して「でんきを消して、スローな夜を」過ごして、地球温暖化防止のために自分たちでできることを静かに考えて欲しいと、手作りパンフレットとキャンドル300個が配布されました。



当日は午後から強い寒気団が日本上空に流れ込み、寒さはそれ程厳しくはなかったが時折強い風がキャンドルの火を消し、再点火してもまた風がという状況のなかで、午後5時から7時までの2時間、大勢の方が美しく並べられた幻想的なキャンドルを楽しまれました。特に階段に並べられたモミの木状のキャンドルには感嘆の声があがり、携帯電話にて撮影される風景があちこちでみられました。

キャンドルホルダー（風よけ）は使用済みペットボトル製。カッターで上部を切り、消えにくいようハンダゴテで空気穴が空けてあります。イベント終了後は勿論リサイクルへ。キャンドルを浮かべるペットボトルに入れた川の水は竹ザルできれいに漉して川へと戻されました。キャンドルナイト in さかえボランティアは高校生から壮年まで、男女取り混ぜたメンバーで世代の隔たりも感じず一体となって企画から運営までイベント成功に向けて熱心に取り組まれました（メンバーには、いたち川 OTASUKE 隊員も参加しています）。このようなイベントを機会に“美しいいたち川の保持”や“地球温暖化防止”のために自分たちでできることを考え、取り組んでくれる人が一人でも多くなることを希望してやみません。
(Y.F)



発行年月
2006年1月

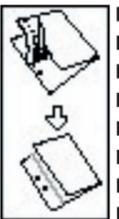
通刊32号

発行：狹川OTASUKE隊（いたちがわおたすけたい）

OTASUKE隊事務局：栄区役所区政推進課企画調整係 〒247-0005 横浜市栄区桂町303-19
TEL 045-894-8161 FAX 045-895-2260
栄土木事務所下水道・公園係 〒247-0007 横浜市栄区小菅ヶ谷1-6-1
TEL 045-895-1411 FAX 045-895-1421
(お便り・お問い合わせは こちらまで)

切り取り線

この部分を切り取ってファイルにすると便利です



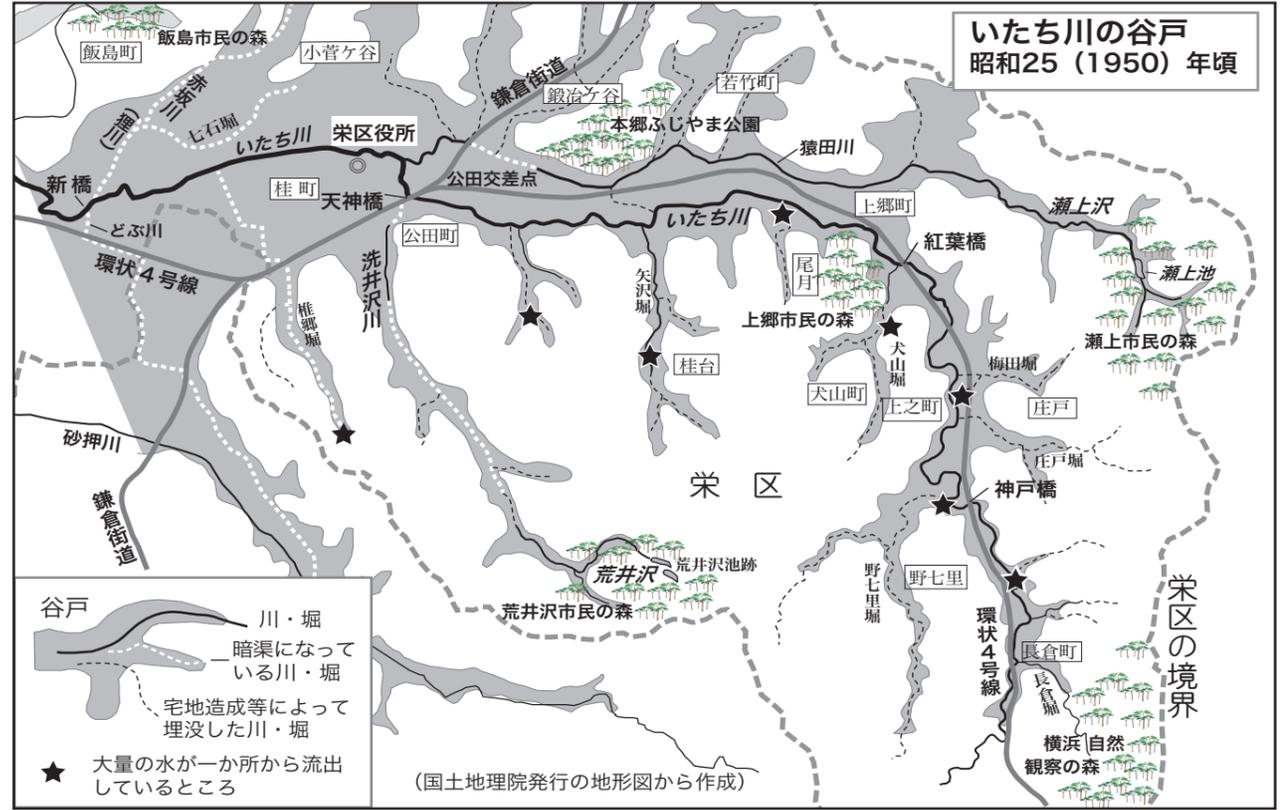
いたち川の水はどこからくるの？ (その2) 隠れた水源を探る

「いたち川の源流はどこ？」という、いたち川上流の円海山緑地を指すのが一般的ですが、この地域から流出する水量同様に多量の水を流出させているのに上流域にある遊水池があります（昨年から雨水調整池というようになった）。いたち川流域には、栄土木事務所と民間で管理しているものをあわせると100か所ほどの雨水調整池があり、その多くは平時には水がなく、テニスコートなどに利用されているものも多い。今回は、いたち川の源流となる支流を紹介した本誌3号（1998年10月発行）で触れなかった、住宅地の地下を通過していたち川に流れ込

む水源にスポットを当てました。左の図は、いたち川の水源を示したのですが、そのなかに5か所の雨水調整池が示されています。これらの調整池には、今でも周辺の住宅地の地下を通過してかなりの量の水が流れ込んでいます。これらの水の源を探るのが今回のテーマです。地下を探ることは不可能ですから、古い地形図から宅地になる以前の地形を思い起こすことにしました。右の図は、この地域が住宅地になる前の地形を図化したものです。現在は大規模な住宅地となっている桂台、犬山、上之町、野七

里、庄戸などには、いずれも谷戸といわれる谷が発達していて、川や堀があり、そのほとんどが水田でした。地形図によると比較的緩やかな棚田が造られていたようです。また、丘陵地の比較的平坦な所では畑が造られていました。黒の点線で示した川や堀のあたりは、宅地造成のため埋められ、現在は住宅地となって現存しない谷戸です。

左の図に示されている「一か所から大量に流出しているところ（図中の★印）」を、住宅地になる以前の地形図(右の図)に示すことにより、消滅した谷戸の水が地下水脈となって雨水調整池やいたち川に流出していることをうかがわせています。このような「幻の水」もいたち川の重要な水源になっているのです。(谷 溪)



【いたち川の水源地】

いたち川 OTASUKE 隊 イベント部 和久井 征治

いたち川本川に流れ込む支川は、下流から紹介すると、①いたち川橋右岸に流れ込む飯島市民の森南側を水源とする水路、②新橋左岸に鎌倉市から流れ込む“どぶ川”（名前のとおり汚れている水路）、③右岸に流れ込む“赤坂川”（別名“狸川”）、④海里橋左岸に流れ込む“椎郷堀”、⑤区役所裏右支川の“猿田川”、⑥左岸に流れ込む“洗井沢川”、⑦稲荷橋左岸に流れ込む“矢沢堀”、⑧光明寺上流部右岸に流れ込む“梅田堀”、⑨“庄戸堀”、⑩上郷橋上流で左岸から“野七里堀”、⑪朝比奈下橋上流部右岸に流れ込む“長倉堀”、本川は資源循環局旧栄工場裏の崖から流れ出ています。

いたち川水源探査計画 いたち川 OTASUKE 隊は今年、3回に分けていたち川の水源地探査を実施します。

第1回は1月28日の“洗井沢川、矢沢堀コース”。ここは、天神橋脇に流入する左支川で、現在は暗渠化されていますが、一部の水を利用して“洗井沢川せせらぎ緑道”として親しまれています。栄図書館裏を起点にし、“あらはばきの祠”がある終点部南側には、公田小学校下の崖からの湧水が流れ込んでいます。暗渠化された道路を進むと、水路が顔を出してきます。その上流部には、環境が整備されていて6月にはホテルが乱舞する“洗井沢川小川アメニティ”があり、終点部で南側、北側に水流は分かれ、北側の水源を求めて山中を進むと、3段に造られた“ため池跡”に辿り着き、その一番上の池跡部が水源となっています。今回は、山頂から鎌倉カントリー脇より桂台団地を縦断する“ゆうもや緑道”を通り、桂山公園で“機織地蔵”を見ながら、矢沢堀の水源から“扇橋の水辺”までの探査を行います。なお、2月には“赤坂川から舞岡公園コース”3月“猿田川から本川上流部コース”を計画をしています。次号でコース紹介を行っていきます。

…それが私の願いです。(西葉小学校 坂田 邦江)

今、この時に輝けるすばらしい先輩の生き方に学び、自分の人生をじっくりと考えてほしい。

三年前、金沢区の西葉小へ転任し、海の再生にかける人々に出会いました。学習を一年間で終えるのではなく、もっと、彼らと共に取り組みたいから「特設クラブ西葉アマモ隊」を設立しました。二〇〇五年には第二回豊かな海づくり大会に出場し、天皇皇后両陛下のご臨席のもと、西葉アマモ隊の代表児童が大会メッセージを発表しました。また、作文部門では衆議院議長の河野洋平氏より大会会長賞を受賞し、大会会場で朗読致しました。

命の尊さを学びました。

その後、桜井小学校への転任。学校下を流れるいたち川で、川の再生に挑み、みごとに川に命を吹き込み、蘇らせた和久井征治さんと出会いました。教えて頂いた数々のお話のなかで、「自分だけでは生きていけないこと、すべてが共存しているからこそ自分も生きていくこと…それぞれに命の尊さを学びました。」

「一〇年前、「夢」を夢として描けない六年生が、卒業を目前に控えていたとき、私は、何とか夢を抱き、夢に向かって生きていってほしいと願いました。それが、私にとっての環境教育との出会いだったかもしれません。白川郷の御母衣ダムに沈む荘川桜樹齢四五〇年ともを移植させること（電源開発の総裁 高崎達之助が指示）が成功し、その桜の実生の苗を育て、現在もその桜の苗を、全国の人々に無償で配り続けている道下隆司さんとの交流を通して、彼の夢から学ぼうと授業を組み立てました。

